

交換留学派遣生 留学報告書



Study Abroad Annual Report 2012

お茶の水女子大学グローバル教育センター

お茶の水女子大学グローバル人材育成推進センター

4

Issue 4, 2012

Experiencing the World

交換留学派遣生 留学報告書の発刊にあたって

現代は急速な勢いでグローバル化が進んでいます。しかしそれと逆行するかのように日本では「ガラパゴス化」が憂慮されています。

ガラパゴスは南アメリカの島で外の世界と断絶したため、独自の進化を遂げた島ですが、日本人の「ガラパゴス化」とは、内向き志向故に急速にグローバル化する世界の中で取り残されてしまうことを指しています。日本は他国に比べると、言語においても文化においても多様性に乏しく、多言語、多文化の環境に慣れていないのかもしれませんが。またそのために海外に出ることを尻込みしてしまうのかもしれませんが。しかしだからこそ、感受性豊かな若い時代に海外に出て、多言語・多文化の環境に身を置き、それに慣れ、生き抜く力を養うことが重要であると考えます。皆さんが持っている可能性を開花させるためにも、私は一年でも早く海外に出てみることをお勧めしたいと思っています。

お茶の水女子大学は2012年度にグローバル人材育成推進事業の全学推進型の11校に採択され、全国の大学の先頭に立ってグローバル人材の育成を始めました。また2014年度から本学は全国の大学に先がけて4学期制を導入し、6月から9月の夏の期間に海外に出やすくしようとしています。これも皆さんにぜひ海外に出て大きく成長していただきたいという私たちの気持ちの表れです。グローバル教育センターは、無限の可能性を秘めた皆さんが世界に出て花開くことができるよう、少しでもお手伝いをしたいと思っています。この報告書は2012年度交換留学に旅立った学生たちの体験談が盛られています。大きく成長して帰ってきた皆さんの先輩たちの体験談を読んで、海外に出て学んでみたい、留学をしてみたいと思った方は、ぜひとも私たちを訪ねてください。私たちは留学の旅に出て、今以上に輝く皆さんの姿をぜひとも見たいと思っています。

グローバル教育センター長

森山 新

CONTENTS 交換留学派遣生 留学報告書 2012

発刊にあたって

グローバル教育センター長あいさつ 森山 新 教授

WHO?

2012 年度交換留学派遣生

WHEN?

交換留学プロセス：PROGRAM REVIEW PROCESS

WHERE?

交換留学派遣協定校

HOW?

留學生活の過ごし方、楽しみ方

2012 年度紀行後アンケート集計データ

WHAT?

2012 年度交換留学派遣生 留学報告書

ストルスマン リリアン シュウ

原田 美緒

荒井瑞希

三村佳緒

中井瞳

田辺裕子

遠山未来

原田佳織

佐藤 香寿実

清野真理子

森田真奈子

川上真結子

矢野裕香

櫻川苑子

千種杏奈

田中直美

田中瞳

大下紗百合

松田郁代奈

中坪佑香

西島理恵

見上葉子

山下佳乃

森田真奈子

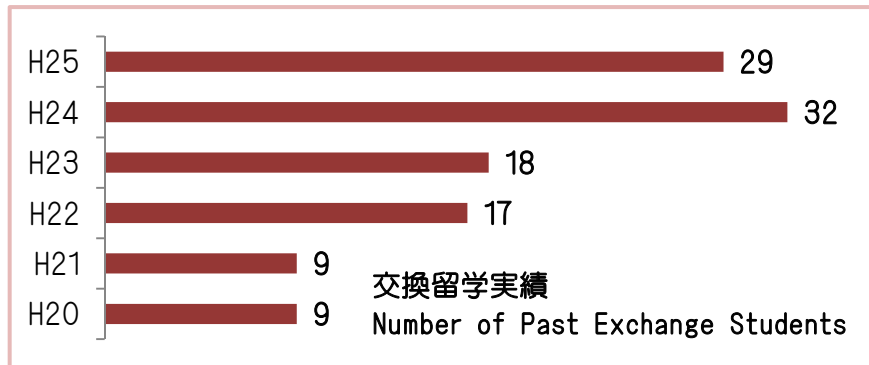
進藤美沙

水谷友紀

生駒有紀

鈴木涼子

2012 年度 大学間交流協定に基づく派遣学生



ストルスマン リリアン シュウ
ロンドン大学 (イギリス)

原田 美緒
マンチェスター大学 (イギリス)

荒井瑞希
マンチェスター大学 (イギリス)

三村佳緒
ロンドン大学 SOAS (イギリス)

中井瞳
マンチェスター大学 (イギリス)

田辺裕子
オックスフォード大学 (イギリス)

遠山未来
アンカラ大学 (トルコ)

原田佳織
パリ・ディドロ大学 (フランス)

佐藤 香寿実
ストラスブール大学 (フランス)

清野真理子
ストラスブール大学 (フランス)

森田真奈子
パリ・ディドロ大学 (フランス)

川上真結子
ブレーズ・パスカル大学 (フランス)

矢野裕香
ストラスブール大学 (フランス)

櫻川苑子
ブレーズ・パスカル大学 (フランス)

千種杏奈
ケルン大学 (ドイツ)

田中直美
ブッパタール大学 (ドイツ)

田中瞳
ブッパタール大学 (ドイツ)

大下紗百合
ウィーン工科大学 (オーストリア)

松田郁代奈
ブカレスト大学 (ルーマニア)

中坪佑香
ワルシャワ大学 (ポーランド)

西島理恵
梨花女子大学校 (韓国) / ワルシャワ大学 (ポーランド)

見上葉子
梨花女子大学校 (韓国)

山下佳乃
梨花女子大学校 (韓国)

森田真奈子
梨花女子大学校 (韓国)

進藤美沙
オタゴ大学 (ニュージーランド)

水谷友紀
パーデュー大学 (アメリカ)

生駒有紀
Vassar College (アメリカ)

鈴木涼子
北京外国語大学 (中国)

留学
準備

4 月 留学説明会

5～9 月 情報集め・語学力アップ

**10 月 留学説明会
募集開始**

10 月末頃 応募締切

11 月～ 学内選考

2 月 学内内定/協定校申請

5～6 月 事前研修
「異文化」や「危機管理」についての
指導（渡航前 4～5 回実施）

留学
開始

8 月 アジア・米国・欧州出発

◆オセアニアは翌年 1～2 月出発

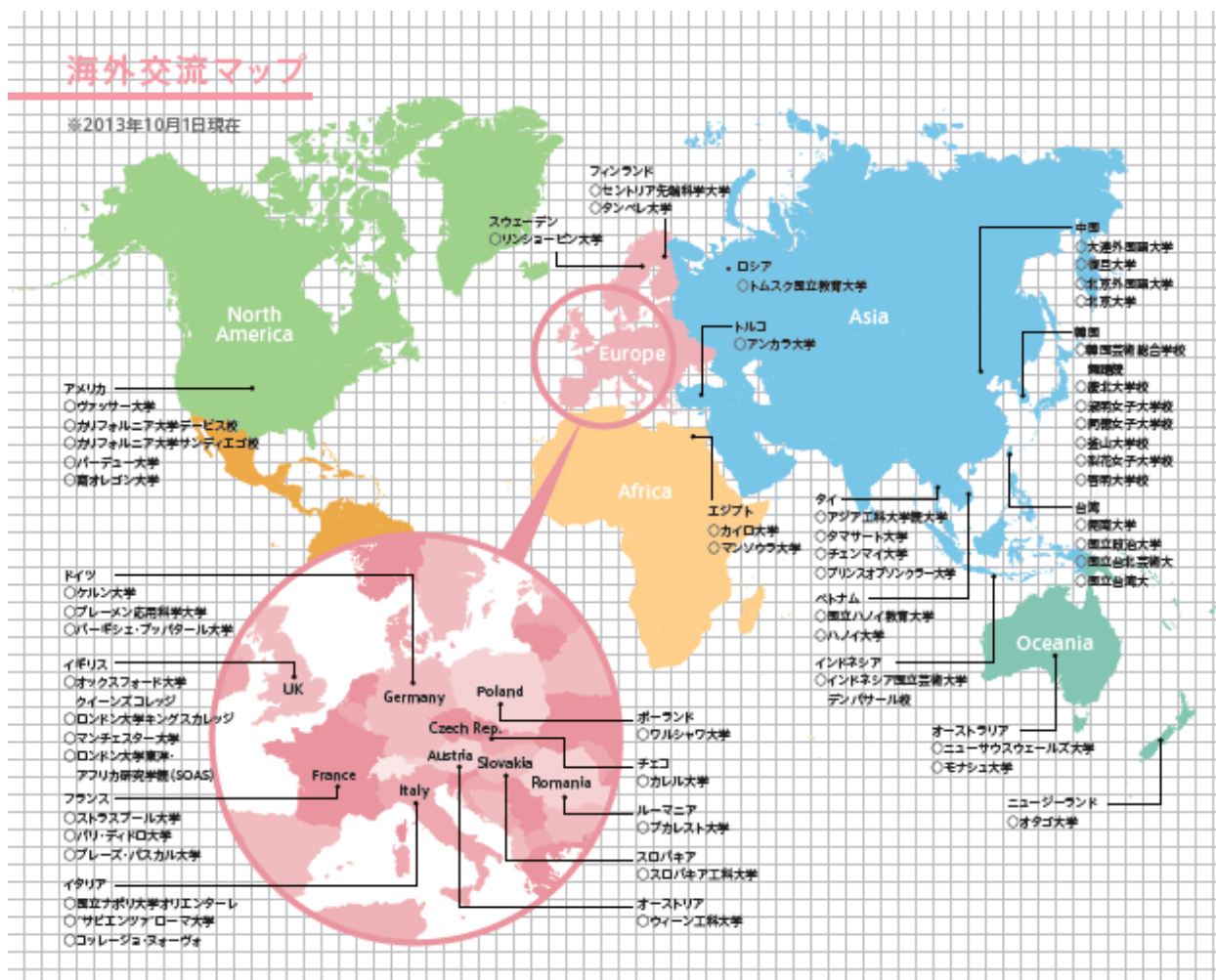
◆韓国は同年 3 月からの留学開始も可

帰国

10 月 帰国報告会/国別留学相談会

◆派遣留学生がそれぞれの留学先のエリア
を中心に、留学に関する疑問や悩みの質問
に答えます。

大学間学生交流協定一覧（部局間協定を含む）



留学生生活の過ごし方、楽しみ方

～アンケートは将来交換留学を希望する学生への情報提供のみならず派遣生自身の留学の振り返り作業としても重要な過程としています。～

生活について

- ✚ 住居費は1か月約3万円。生活費は1か月約3-4万円。物価は東京より安く、特に外食は300-500円程度ですむ。留学生用の寮は、新しくきれい。早めに申請して確保した方がよい。(梨花女子)
- ✚ 学生寮(一人部屋、トイレシャワー共同) 食事、電気、ネット込みで388NZ(約27千円)。寮でニュージーランドの友人が沢山出来た。(オタゴ)
- ✚ 大学寮。1か月の住居費4万円程度(朝夕食事込み) 生活費2万円(週末の日帰り旅行含む) 外食費は高め。(マンチェスター)
- ✚ 学生アパート。1か月の住居費4.5万円、生活費4.5万円。学割がきくことが多い。(パリ)

学業について

- 韓国語の語学授業以外は英語の授業を受講。毎週100-200頁の英文を読みこなすのが大変だった(梨花女子)
- 多くの授業が少人数ディスカッションベース。予習で大量の論文も読む。(ヴァッサー)
- お茶大で学べない、Spatial Planningについての授業をとった。本当に自分の学びたかった分野であり、意願かなった感じがする。(オックスフォード)
- 専攻の美術史では、研究の方法を実物や資料のある現地で学べられたことはよかった。視野が広がった。(パリ)

留学生生活全般について

- お茶大留学していた友達と事前に知り合っておくと心強い。(オタゴ)
- 留学生向けのイベントが多々開催されるなど留学生には手厚いサポートがあった(ヴァッサー)
- Japanese society の行事が多く、日本語学科の事まず仲良くなり、international society ノイベントで友達の輪が広がった。(マンチェスター)

交換留学生に求められているもの

- ✧ 新しい視点を抵抗できるのが強み。いかに自分から動いて、存在感をだしていくか。(オックスフォード)
- ✧ 交換留学生といえど、現地のネイティブレベルの語学力が求められる。日本の常識は通用しない。派遣先の文化をよく調べてからいくとよい。(ウィーン)
- ✧ 「日本ではどうなの?」とよく質問された(ストラスブル、ブカレスト)

交換留学報告書

WHAT

イギリス・ロンドン大学

文教育学部 言語文化学科
グローバル文化学環 4年
ストルスマン リリアン シュウ



私のロンドン・SOASへの留学の動機は、ざっくりわけて二つありました。一つめに、もともと専攻していた開発学の分野において先進的な教育機関で、英語を使って多角的にその学問に関する視座を学び、自分の持つ関心・疑問を解き明かしていくこと。二つめに、日本という特殊な社会の中で翻弄されていた自分のアイデンティティを再構築することでした。ロンドン・SOASは結果的に、両方の目的を達成するのにとても理想的だったと思います。

まず、学問に関してですが、交換留学生は、どのディシプリンの授業を取っても問題ありません。私は開発学と、地域研究に関する授業を取りました。開発学の分野では、噂どおりにSOASのラディカルな姿勢を受け継いだ学生たちとの熱いディスカッションもあり、広く深く開発の政治的・経済的側面における基礎的な枠組みについて学ぶことができました。しかしマクロの視点から、文化・社会的側面にフォーカスすることが少なく、また私が追及していきたいと思っていた開発そのものの意義に対する懐疑的な問いは授業を通してなされることがなか

ったので、その点は少し残念でした。

また、地域研究分野では、"Ethnography of Japan"を取っていました。「日本人であるとはどういうことか」という常に抱いていた疑問について自分なりに解釈するにあたり、日本の外からの視点を取り入れるため受講していました。自分の属する社会が、人類学的な用語や概念で切り取られ、説明されていくさまは中々刺激的でしたが、同時に人間を見る学問の可能性と限界を両方目にしたように思います。

講義は、基本的に授業時間2時間+討論1時間から成っており、その準備として主に課される膨大なリーディングをこなしていました。そのお蔭か、本や論文を手抜きしつつ、重要な部分を取り出して読む方法が身に付いたと思います。また、授業に参加する際も、期末エッセイ等で評価される際も、授業で学んだ知識を道具として、自分の考えをクリアに論理的に提示することが常に求められました。この体験は、今後学びを続けていく上でとても大切な糧になると確信しています。

留学でのもうひとつの目的として、自分のアイデンティティの発見がありました。日本においては、色眼鏡を通さずに人と関わるのが難しく感じており、多人種・多文化が混じり合うロンドンはその束縛から私を解放してくれました。結果的に、この一年間を通して、曖昧であったアイデンティティだけでなく、価値基準が確固としたものになり、今後の人生においてどのように社会と関わっていくか、その方向性が定まったように思います。

ロンドンで過ごした1年間で得た刺激、友人、経験、想いは全てかけがえのないもので、また今の、これからの私の生き方を色濃く縁取っていくであろうと強く思います。

イギリス・マンチェスター大学

文教育学部 言語文化学科
グローバル文化学環 3年
原田美緒

留学は、高校時代からの夢でした。その理由は、日本を離れ新しい環境で長期間生活し、自分自身の成長を見てみたかったからです。イギリスは開発学の本場、そしてその中でもマンチェスターは多国籍・多人種であり留学生がたくさんいることから、日本とは全く違った大学生生活を送ることが出来ると思い、マンチェスター大学に留学を希望しました。

現地では‘British Society in a Globalising World’, ‘Globalisation and Developing Societies’など、主に社会学の授業を受講していました。授業はそれぞれ講義が2時間、少人数での Discussion 形式の Tutorial が1時間あり、平日はほぼ毎日授業がありました。しかし日本と違ってこちらでは自主学習の時間が多く、多くの Reading を課され平日はそれに追われていました。essay やその他の課題も多く、テスト前は特に図書館は学生でいっぱいでした。勉強は大変でしたが、その分空いた時間は友達とパーティーを開いて一緒にご飯を作って食べたり、旅行に行ったりと楽しんでいました。

近所のスーパーに行ったらイギリスで売られている材料でご飯を作ること。道をでると様々な国の人たちが歩いていること。図書館の中でも色々な人に囲まれて勉強できること。現地の学生と同じように大学生活を送ると当たり前になることでさえも、私にはいつまでたっても新鮮で、まるで夢の中にいるようでした。

現地で出会った人達は、私とは生まれ育った環境や価値観が異なり、彼らと交流する中で、自分がいかに偏った考え方をしているのかを実感させられました。自分は‘グローバル文化学環’に所属しているのに、狭い視野で保守的な考え方しかできてなかったことに気づき、本当

の‘グローバル人材’について考えさせられました。

20年の人生のうちのたった9か月間ですが、今までで一番濃く、新鮮で、なくてはならない大切な経験になりました。心から尊敬できる人との出会いもありました。もちろん楽しいことだけではなく、苦い思いもしたし、落ち込んで泣いたことも、鬱になって部屋に閉じこもったこともありました。新しい場所、人に囲まれ、現地の一学生として大学に通うということとはた易いことではなく、授業や語学の面、また日常生活においても悩みは尽きず、常に試行錯誤しながら過ごした留学生活でした。それら全て良い思い出で、乗り越えたことに意義があり、私にとって必要不可欠な過程だったのだと思います。また日本を長期間離れることで初めて自分自身を客観視することができました。

自分がマンチェスターで得たことや感じたこと、考えたことは、残りの大学生活やこれからの人生において間違いなく大きな影響を持つと思います。留学することで日本での生活も見つめなおすことができたし、その反省を生かして留学後、より有意義に過ごしていけると思います。

イギリス留学は、「達成した結果」であると同時に「将来のきっかけ」になりました。



WHAT

イギリス・マンチェスター大学

文教育学部 人間社会学科教育科学 3年
荒井瑞希

10ヶ月前を振り返ったとき、そこには日本とイギリスとの文化の違いや言語の壁に戸惑っている自分がいます。その頃の私は、とにかく新しい環境、新しく出逢う人々に慣れる事で精一杯の状態でした。しかし、現在の私は、様々な人々との出会いを純粋に楽しむことができ、気軽に声を掛けてくれる友達が世界中にいます。私にとって10ヶ月間の留学は、とても短かったように感じられますが、日々の経験・出来事を通し、私を大きく成長させてくれました。

マンチェスター大学では、これまで経験したことのない学習形態である、チュートリアルやグループワークを体験しました。特に、英語に自信の無かった留学初期は、チュートリアルで発言するのに、いつも一歩踏み出せないでいました。そんな思いを持っていた時、ネイティブの友人が、「第二言語で発言するのはとても勇気のいることだね。だから、私はあなたをとても尊敬しているよ。」と、優しく励ましてくれました。私の悩みや思いを理解してくれる人の存在に気づいてからは、それまであった劣等感やプレッシャーがふっと無くなり、逆にこの環境で自分がどれだけ出来るか試すことが楽しくなりました。ペアワーク・グループワークでも同様に、自分の役割を積極的に見つけて、“自分がいる価値”を可能な限り自己の力をグループに発揮しようと努力しました。私がしっかりと考え、意見を持っている事を示せば、クラスメイトはもちろん、先生も私という個人を認識し、私の意見や考えに耳を傾けるようになってくれます。そして最後には、大学の図書館で時間をかけて文献と向かい合い、考えを自分なりに精一杯表現したエッセイで、ファーストグレードを収める事が出来ました。殻を破って外に飛び出すのは勇気があることですが、努力と周

囲の暖かいサポートによって、私は小さいながらも結果を得る事が出来ました。

学問に専念する傍ら、私は予めからの目標であった海外での職業体験に挑戦しました。外国人留学生ということもあり、何度も失敗を重ねましたが、最終的に、マンチェスターではNative Marketing Moderatorというアルバイトを、そして、ロンドンでは3ヶ月間のPR&Marketing インターンを経験しました。イギリスの企業文化を肌で感じ、大学では鍛えられなかったビジネス英語や多国籍の同僚・上司との付き合い方を学ぶ貴重な経験となりました。

この10ヶ月間は、私の人生の中で最も内容の濃い、学びの詰まった期間だったと思います。家族や友人はもちろん、先生方やその他多くの人々の協力・理解があったからこそ、自分でも確信を持ち“全力を出し切った”と言える留学生活を送る事が出来たのだと思います。今後は、留学中に育んだ人々との繋がりを大切に、多くの経験を通して実社会でグローバルに学んだ事を活用して行きたいです。

イギリス・ロンドン大学 SOAS

文教育学部 人文科学科
比較歴史学コース 4年
三村佳緒

帰国して様々な人から、「留学はどうだった？」という質問を受けて、私は「大変だったけど楽しかった、というよりは、楽しかったけど大変だった、というのが正直な気持ち」と答えていました。帰国直後の率直な感想だったのだと思います。

一番大変だったのは、やはり勉強でしょうか。私は日本史を専攻しており、SOASでも日本史や日本文化関係の授業を主に受講していたので、日本史の基礎的知識はあったにも関わらず、やはり毎週課される大量の Reading をこなすだけでも一苦勞で、英語の講義を1~2時間聞くことも、ディスカッションで発言していくことも疲れるばかりで、最初は精神的にも辛い時期が続きました。ですが、そうした問題は英語力の向上によって次第に克服されていくと信じて地道に努力を重ねたことが良い結果に繋がったと思います。「Readingなんて余裕」なんてことは最後までありませんでしたが授業準備が苦痛になることは少なくなりました。エッセイを書くことも難関の一つでしたが、担当教授の元に足繁く通いアドバイスをもらいつつ書くことで、少しは慣れたと思います。

逆に、楽しかった思い出で大きな割合を占めるのは、やはりロンドンで出来た友達と過ごした時間です。寮に入っていたのでフラットで度々行われるパーティーに参加したり、授業を通して知り合った友達とロンドンのあちこちに出かけたり、長期休みには旅行にも行きました。ヨーロッパ各国に行ったことも良い思い出ですが、私は英国内の旅行を中心にしました。様々な英国の顔をみることができ、イギリス・ロンドンには留学前から個人的な思い入れがあったのですが、ますます大好きな国になりました。

ここまで書いてきて思うのは、ごくごくありふれた留学体験記になったなあ、ということです。考えてみれば当然のことなのかもしれません。留学というのはそんなに特別なことではないと私は思っています。場所をお茶大からロンドン大学 SOAS に移して、正規学生に混じって極普通の一学生として毎日を過ごした、ただそれだけのことです。留学というのは淡々とした日常生活の積み重ねだということを、これから留学をされる方には頭の片隅においてほしいと思います。なんてことのない日々の中に、新体験の欠片が常に散りばめられていて、それが大切なこととして、自分の糧として残っていることに気づくと思います。



10ヶ月の留学が十分満足できるものだったのかと問われると、自信をもって YES と言うことはできません。自分の欠点を突きつけられる瞬間のほうが多かったような気さえします。それでも、留学をしたことに一片の悔いはなく、そのように留学を終えることができたことを嬉しく思います。支えて下さったすべての方々にも強く感謝し、この報告書を締めさせていただきます。

WHAT

イギリス・マンチェスター大学

文教育学部 人文科学科
地理学コース 3年
中井 瞳

2012年8月。真夏にも関わらず、スーツケースに入りきらない厚手のコートを羽織り、成田空港の出国ロビーを歩く私の姿がありました。はじめての一人暮らし、語学研修で訪れて以来、1年ぶりのマンチェスターへ向かう私の心の中は、不安よりも期待で一杯でした。絶対に他の人には負けないぞ、という根拠のない自信に満ちあふれていました。それから訪れる挫折の山などまったく知らずに。ずいぶんお気楽だったと今となっては思います。

今となっては全てが良き思い出ですが、改めて振り返ると、大小様々、1年を通して悩んでない時はなかったと言えるほど、「悩みに悩んだ1年」でした。

まず大きく落ち込んだのは、渡航後3ヶ月経った頃。自分の英語力が中々つかず、また、イギリス人の友人もできず、とてももどかしく感じていました。そういった状況の中、先生に泊まりがけのフィールドワークに参加させて欲しいと懇願し、参加を許可してもらった「islands」という講座がありました。生徒はイギリス人7人と私一人の計8人。彼らは決して拒否はしていないけれど、積極的に迎え入れてくれる感じでもなし。話かけても、私の英語力不足も相まって、会話は続かない。そんな状態のまま、7泊8日のフィールドワークの日を迎えました。とにかく不安で一杯でした。兎に角、きっかけを見つけては話しに加わってみました。また、いつでもみんなの視野の中に入る様に努めました。すると、少しずつ私を誘ってくれる様になりました。さらに、何気ない会話の中の次の一言が私の第一関門を完全に破ってくれました。

「瞳って勇気があるよね！」続いて、「瞳は、自分では気づいてないだろうけれど、授業が始ま

ってから2ヶ月たった頃から急速に英語の力がついてきているよ。」とも教えてくれ、「もっと積極的に話せば、帰る頃にはペラペラになれるから、私達が話相手になるよ。」と言ってくれたのです。この一言がその後の私の行動を大きく変えてくれたのです。つまり、英語が通じる通じないの問題でなく、それ以前に相手に自ら進んで意志表示をしていかななくてはいけないのだ、と気付かされた私は、怖いもの知らずに友達の輪の中に飛び込んで行ける様になりました。

このように、様々な苦難がありながらも、1年を乗り越えてこられたのは、周囲の温かい支えがあったからだと思います。一緒に勉強し、一緒にご飯を食べ、映画を見ながらのんびりと過ごすこともあれば、熱い議論を交わすこともありました。それだけではありません、大学に行けばそこにはグループワークを共にする友達がいるほか、研究室にわざわざ呼んでくれて相談に乗ってくださる先生方がいました。マンチェスター大学で過ごした1年を一言で言い表すとすれば、「最高に恵まれた環境で過ごせた、かけがえのない瞬間だった」と言えるでしょう。



イギリス・オックスフォード大学

文教育学部 言語文化学科
英語圏言語文化コース 3年
田辺裕子

オックスフォード大学は、オックスフォードという街全体に広がる大きな大学です。到着初日から道を聞いてまわった私は、優しい人々ばかりだということに感激し、約1年の留学生生活をスタートさせました。High StreetにあるQueen's Collegeが私の所属した寮でした。14世紀に設立された伝統あるカレッジです。

オックスフォード大学は大学の機関とは別に、30余りのカレッジによって成り立っています。これは、寮のようなもので、オックスフォード大学の学生は必ずいずれかのカレッジに所属して生活を送ります。学部とは別にカレッジという場があることで、専攻も様々な仲間達を持つ事ができます。寮と言うと、寝泊まりするだけのよう聞こえますが、オックスフォードのカレッジはそうではありません。学生の勉強の軸となる少人数での授業は全てカレッジごとに行われます。同じカレッジに所属する同じ専攻の学生と共に、教授の親身な指導のもと議論を交わしつつ理解を深めて行くスタイルを取っているのがオックスフォード大学の特徴です。

英文学を専攻した私は、できるだけ多くの作品や資料を読みあさり、小論文にまとめるというような自立した勉強のプロセスを2週間に一回のペースで行っていました。ハードな課題の連続でしたが、素晴らしい環境で学ぶ意欲を掻き立てられる毎日でした。オックスフォードにはBodleian Libraryという中心となる大きな図書館があります。それとは別に、各学部の図書館があり、さらにカレッジごとに図書館があります。クイーンズカレッジの図書館は24時間開いており、遅くまで滞在して課題に取り組む学生の姿を目にすることも珍しくありません。カレッジでは、学生が主体となって新入生を歓

迎し、College familyを作ることで少しでも早く馴染んでもらう工夫が成されています。これは、在学生中からCollege motherとfatherを一人一人の新入生に割り当て、入学してからのサポートをしてくれるというものです。私にも、親身になって声をかけてくれる優しい親と兄弟がいて、すれ違う度に挨拶をしてお喋りができる「家族」が初日からいたので、とても安心しました。

このように、オックスフォードでの1年間は、整えられた素晴らしい環境で学問に励んだ1年でした。街のあらゆる場所で様々な学ぶ機会と環境が揃えられているオックスフォードには知的で面白い人々が集まり、街をより一層知的刺激にあふれた場所にしています。学部2年生でこうした経験ができたことに感謝し、これからに活かせるように一層頑張ろうとモチベーションを得た留学生活でした。



WHAT

トルコ・アンカラ大学

文教育学部 人文科学科
グローバル文化学環 4年
遠山未来

【トルコを選んだきっかけ】

大学一年生の春休みに、学科の友人とトルコへ旅行に行ったことがきっかけでした。むかしふるさとにあったトルコ文化村という観光施設ではたらいっていたトルコ人と親しかったこともあり、はじめて訪れたトルコにすごく懐かしさを感じたことと、もともと関心のあった中東やイスラームをトルコを通して学びたいとおもったこともきっかけです。

【アンカラ】

トルコはちょっと離れただけでも、地域によって気候や景観、文化、人間模様までも変わります。わたしはトルコの真ん中アナトリア地方にあるアンカラという街で生活しました。アンカラは首都ということもあって建物もおおく立ち並ぶ近代的な街並みが印象的ですが、古都イスタンブールの活気にくらべるとまだまだ寂しいものがあります。わたしはさいごまでアンカラの重たくて冷たい雰囲気が好きになれなかったのですが、アンカラは交通の中心に位置していたこともあり、おかげで旅行するのにはとても便利でした。

【学校】

ほとんどの留学生が前期をトメルで過ごし、後期から大学で講義を受けることになります。トメルはアンカラ大学が運営する外国語スクールで、わたしたちはそのなかのトルコ語コースで勉強します。いろいろな国から生徒が来ていて面白いこともたくさんあったのですが、なかでも日本人留学生をもっともおどろかせたのがトルコ語の文法をほとんど知らない外国人がいちばん積極的にトルコ語をしゃべっていたこ

と！それとみんな誕生日になると自分からケーキを買って教室でパーティーを開いていたのですが、これってどこの国の習わしだったのでしょうか・・・。

【旅行】

いちばん心に残っているのは、はじめて訪れたトルコの田舎町や海への旅行です。帰国の直前に地中海の小さな町に行ったのですが、例年よりも一カ月早い海開きで5月の海水浴を満喫しました。トルコの海はどこもヨーロッパからの観光客が多いので、わたしたちは日本人でトルコ語もわかるということでホテルを営むトルコ人夫婦にたいへん親切にいただきました。ホテルに宿泊していた別のトルコ人夫婦とみんなでおしゃべりすることがおおかったのですが、旦那さんがとても物知りな方でトルコのいろいろなことを話して聞かせてくれました。それで政治のことをはなしているときトルコはこのままだと戦争みたいになってしまうとも言っていたのですが、まさかこんな近くに大きなデモが起こるなんて想像していなかったです。

フランス・パリ・ディドロ大学

人間文化創成科学研究科
比較社会文化学専攻 博士前期課程
歴史文化学コース
原田佳織

私はフランスのパリ第七大学（パリ・ディドロ大学）に交換留学生として1年間在籍しました。寮には現地学生の他に各国からの留学生も多く住んでいました。交換留学生として派遣していただいたことで、渡航前から第七大学の日仏学生のアソシアシオンの方々が連絡をくださったたり、初日には日本語学科の先生が日本からの交換留学生のためにオリエンテーションを開いてくださったりしたので安心して留学生生活を開始することができました。

大学の授業としては、前期は主に語学コースをとり、美術史の講義の聴講もしました。後期はそのほかに第七大学で美学の講義を履修しながら、他のパリ大学の修士課程でも聴講生として参加を許可してくださった美術史のゼミ・講義に出席していました。

語学のコースではフランス語を学びながら各国からの留学生たちと話をすることができました。とくに第七大学に多いアジアからの留学生と交流できたことは、フランスで美術史を学びたいと日本から留学をした自分にとって視野の広がる経験でした。第七大学の修士課程で履修をした美学の授業は、一学期間あるひとつのテーマについて複数の先生方や研究者の方から講義をしていただくものでした。相当なスピードで二時間続けられる講義を聞き取るのは容易ではありませんでした。それでも聞き慣れてくると毎回数ページのノートを取り、参考文献にあたるといこともできるようになりました。しかし学期末の筆記試験は辞書などの使用が許可されず、現地学生と同じ条件のもと三時間論述するというもので本当に苦労しました。美術史の授業では、19世紀後半から20世紀初頭のフ

ランス美術を中心として美術批評について、実際の研究や調査により即したかたちで学ぶことができました。専攻はフランス近代美術史であったのですが、たまたま参加者中で唯一のアジア人だったこともあり、日本人として無意識であったことに気付かされる場面も多々ありました。大学や図書館での勉強と、歴史のあともあちこちに残る街の中にこうして暮らすことで得られる実感とが繋がっているということは、パリを留学先とした最大の収穫であったと思います。

最初は、言葉の面の困難だけでなく習慣や制度の違いに戸惑うことばかりでした。一方で、現地で生活をして初めて気が付く人々の暮らし方、考え方も多く、日々楽しみもたくさんありました。派遣前に想定されたような非日常の留学生活ではなくて坦々と学ぶことのできる日常を得られたのは、周囲の人たちの温かい支えがあつてのことでした。自分の身となった貴重な経験を、今後研究に役立てるだけでなく何らかのかたちで還元してゆきたいと思います。そして様々な可能性のあるこのような留学制度を多くの方に活かしていただけると良いと願います。

WHAT

フランス・ストラスブール大学

人間文化創成科学研究科
ジェンダー社会科学専攻
地理環境学コース 博士前期課程 2年
佐藤香寿実

フランスでは何もかも、人によるし、場合による。*ça dépend* (サ・デポンまたはサ・デパン) とは、フランス語で「人による」、「場合による」という意味であるが、フランス人は、この言葉をととてもよく使う。レストランで「どの料理がおすすめか」と聞いても「*ça dépend* (あなたの好みによる)」。

友達に「一人旅が好きか」と聞いても「*ça dépend* (場合による)」。

それは確かにそうだろうけど、会話にならない…とため息をつくこともしばしば。それくらい、フランスは *ça dépend* の国なのだ。これは個人主義であることに変わりがあるのだろう。それぞれの人が広い自由裁量を持っており、柔軟に（それぞれ自分の考え方に基づいて）規範を超えて行動していることの表れだ。

また、強い中央集権の伝統を持ちながら、地域によって文化も言葉も大きな違いがある。さらに、移民大国としても有名なフランスでは、日本にいる時には想像もできないほどさまざまな出自を持つ人が存在し、宗教や肌の色も多種多様だ。

この *ça dépend* の国で、私は10か月間勉強をし、あそび、旅行し、色々なものを見た。このように日本の外に出て異文化社会に身を置き、多文化の存在を知ることで、日本の見え方が変わったように思う。ストラスブール大学には日本学科があり、多くのフランス人学生が日本語や日本史を勉強していたが、彼らの日本に対する熱いまなざしは、日本文化の強みや独自性を私に教えてくれた。アニメやゲーム、ドラマ、アイドルなどのサブカルチャー、高度なテクノロジー、治安が良く秩序だった社会、日本語の難しさと表現力。そういう部分に惹かれている

友人たちの姿を見ることは、私にとって喜ばしいことであった。と同時に、彼らが見つめているのは日本のごく一部であるのではないか、という違和感、さらには「日本文化」とは、「日本」とは何を指しているのか、という疑問が生まれた。今は日本史の教科書を読みなおしている。

「外」を見るための留学は、「内」を見つめ直す旅でもあった。「内」と「外」の境界線はもちろん、*ça dépend* ではあるが。

もうひとつ、留学に出て変わったこと。それは自分の生き方について、可能性がぐんと広がったことである。フランスでは日本のような新卒一括採用を取っておらず、各自がインターンなどの経験を積みながら就職先をそれぞれで探す。私の場合、留学前はこの先ずっと日本で暮らしていくという考えしか持っていなかった。今でもその見通しは変わっていないが、他の可能性を頭の隅に置くようになった。留学中に、幾度も国境を越えて様々な国を渡り歩いて生きてきた友人たち、様々な出自を持つ友人たちと出会い、人生は人それぞれだと実感した。やろうと思えば、チャンスは無限に広がっている。

今、フランスが好きかと聞かれれば、私は迷いなく「*ça dépend*」と答えるだろう。好きなどころもあるし、嫌いなどころもある。好きか嫌い、日によっても変わる。適当で潔くないという声も出そうだが、白黒つけずに可能性を残しておくこの考え方は、私が留学で得た宝物である。

フランス・ストラスブール大学

文教育学部 言語文化学科
仏語圏言語文化コース 3年
清野真理子

私は本学に入学した当初からフランス留学に興味を持っていました。理由は現地で生きたフランス語を使って学ぶ事に興味を抱いていたためです。また、文学と映画に興味をもっており、その両者を学ぶ事の出来る大学に留学できたらと考え、ストラスブール大学での留学が始まりました。

ストラスブール大学は三つの大学が 2009 年に統合されたもので、イメージ通りキャンパスが大きく、学生も大勢いました。

到着してすぐオリエンテーションの後に授業が始まり、国際交流課の先生や学部の担当の先生、現地の友人等、たくさんの方が履修等の相談に乗ってくださいました。当初の映画と文学の授業を履修する予定は芸術学部（の中の映画のコース）の授業だけで十分ハードだということとで実現できませんでしたが、それでも大変興味深い授業を受ける事が出来ました。ストラスブール大学の芸術学部には舞台芸術学科というコースがあり、その中で 1 年の後期から映画、演劇、舞踊のコースに分かれる事になります。私はコースが分かれる前の学部 1 年生たちと同じような授業の履修をしたので、映画のみならず舞踊や演劇についても各国の作品に関して幅広い内容の講義を受ける事が出来ました。

私の受けた授業は大教室での講義が多かったのですが、英語とフランス語の授業は少人数でのディスカッションを中心としたものでした。英語の授業ではディスカッションのテーマが多岐にわたっており、ポップ・カルチャーや若者文化などの軽いものからアメリカやフランスの政治など様々なものがあり、また時には学生同士の文化的背景なども垣間見えるようなことも

あり、普段講義形式の授業が多く、授業内では他の学生と意見を交換する機会がほとんどなかったため、この時間は大変貴重だったと思います。

多くの留学生を受け入れていることから、学生同士の交流のための団体や、語学を教え合うサークル等があり、多くの人と知り合う事が出来ます。日本語学科のフランス人と日本人学生の交流も盛んなので、今後ストラスブール大に行かれる皆さんもたくさんの友人に出会えるかと思っています。



キャンパスの建物は近代的な作りでキャンパス周辺も路面電車やバスが多く近代的で便利な反面、路面電車で 20 分ほど行くと観光地となっているストラスブール大聖堂やプティット・フランスなど古い伝統的な建物が見えてきます。ストラスブールは古いものと新しいものが共存しているという意味でも大変面白い街だと思います。

WHAT

フランス・パリ・ディドロ大学

文教育学部 芸術・表現行動学科
グローバル文化学環 3年
森田真奈子

フランス留学を終えてまず思うことは、フランスへのイメージが大きく変わったということです。フランス人はプライドが高くで冷たい…出発前はそんなステレオタイプを持っていましたが、初めて現地を訪れて見えてきたのは、人間味にあふれる寛容な人々の姿でした。

フランス留学の最初で最大の難関は、出発前のビザ取得などの手続きでした。結局ビザの取得ができたのは既に授業が開始した後。さらに、直前になって最初の2週間は寮の部屋がないと言われた時には途方に暮れ、こんな所に留学したくないと思うほどでした。オリエンテーションや履修登録期間も逃し不安だらけのスタートでしたが、そんな状況の中で困惑する私を助けてくれる多くのフランス人と出会いました。人の親切が本当に身に染みる体験でした。



授業に関しては、東アジア学部の授業や英国の脱植民地化と国際関係、フランス語の語学授業を2つ受講していました。日本の現代社会の授業では、貧困問題とジェンダー問題をテーマに据え、社会の閉鎖性やマイノリティに対する

差別などを詳しく扱っていたので、日本社会を見る新たな視点を得られたと思います。また、フランスの授業では、課題等はほとんど出されず予復習や文献購読などを自分で進めなければならない点や、試験では短い問題文に対してひたすら論述しなければならない点が難しかったです。授業外では、学内外の日本人とフランス人の交流サークルに参加していたため、常にフランス語を話す機会も作れ、休日にはメンバーのお家に行ったり、公園でピクニックをしたりと楽しい時間を過ごすことができました。また、フランスは学生に対する様々な割引があり、大の音楽好きの私は5~10ユーロの学生券を手に入れて週に一回はコンサートに通っていました。

フランスの生活で興味深いと思ったのは、フランスの多文化主義です。フランスでは出自別の統計をとること自体が差別として禁止されているため、正確な移民の割合はわかりませんが、フランス全土では約25%、パリでは半数以上が移民または外国人ではないかと言われています。一方で、フランス語に対するアイデンティティはとても強いため、フランス語を話せないとコミュニティに入ることが難しく、逆にフランス語を話せると見た目に関わらずフランス人のように扱ってくれます。多種多様な人々が共生する国際都市で過ごせたことは、とても新鮮な経験でした。

出発時から大変なトラブルに見舞われ、ストレスの多い滞在でしたが、それでもパリに戻りたくなるのは、非常に無秩序ながら何もかも受け入れる寛容さを持ち合わせた都市だからだと感じます。多様性を認めながら自分の価値観を大切にする。そんなフランス文化に魅了されながら、前向きに成長できた6ヶ月間だったと思います。

フランス・ブレーズパスカル大学

文教育学部 言語文化学科
仏語圏言語文化コース 4年
川上真結子

私はフランスの中央に位置するオーベルニュ地方にあるクレルモン＝フェランという町のブレーズ＝パスカル大学へと留学しました。周りを山に囲まれており、自然が溢れる小さな町です。ミシュランやボルビック、火山などが有名です。私も留学をするまではクレルモン＝フェランという町の名前を知りませんでした。パリではないフランスの落ち着いた田舎町での暮らしを体感してみたい、日本人の少ない環境で学んでみたいという思いからこの大学を選びました。日本人の留学生は、お茶大からしか派遣されていなかったのもので、その分色々な国の友達と仲良くなることができたと思います。

大学では、美術史を専攻していました。前期は語学力に自信がなかったのもので、大学の授業を聴講させてもらいながら夜は週に2日、5時間ほど語学学校に通っていました。ヨーロッパ圏外の留学生向けに語学のクラスは開講されておらず、自分で追加料金を払って授業を受けていました。後期は、現地の学生と同じように授業と試験を受けました。語学学校にも引き続き通いました。大学の授業や試験は日本よりも厳しい印象を受けました。授業はとても難しかったのですが、フランスを中心にヨーロッパやアメリカの美術のことを非常に詳しく学ぶことができ、勉強になりました。図書館も美術関係の本が充実しており、よく利用していました。生徒も勉強熱心で図書館の自習スペースも常に満員でした。試験に関しては、3時間フランス語での論述試験であったため、大変苦労しました。評価も留学生だからといって甘くしてくれるわけではなく、厳しく採点しているようでした。また、留学生向けに開講されていた英語での授業も履修していましたが、フランス語を勉強し

ているのだから英語を話せるのは当たり前、といった雰囲気でもちろん発言するのになかなか苦労しました。しかし、苦労した分これからの勉強に生かせることをたくさん学ぶことができたと思います。大学の授業は、講義形式のものを受講していたので、なかなか現地の学生とコンタクトをとれる機会を見つけ出せずにいました。しかし、寮に住んでいたため、共用のキッチンなどで出会った学生と仲良くなり、宿題を見てもらったりしてフランス語を勉強することができました。また、他の国からの留学生の友達もたくさんできました。

語学が思うように伸びず、悔しい思いをすることがたくさんありました。しかし、親切な人々に恵まれ、日本とは全く異なる様々な文化を吸収することができ、一生忘れることのできない素敵な10ヶ月間になりました。更に留学を通じて、思考がとても前向きになったように感じます。留学で学んできたことをこの先の人生でも生かしていけたらと思います。



WHAT

フランス・ストラスブール大学

人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻
歴史文化学コース 博士前期課程
矢野裕香



「ヨーロッパの十字路」—これはケルト、ローマ帝国、ゲルマーニア、フランク王国という諸文明の影響を受けて、ヨーロッパの歴史を象徴する都市となったストラスブールが持つ呼び名です。ドイツ語の **Straßburg** (シュトラースブルク) すなわち「街道の街」の語源を持つこの都市は古くから交通の要所として栄えてきました。ドイツやスイス等近隣諸国への交通の便が非常に良いところから、現在でもその地理的重要性を実感することができます。フランスとドイツにまたがった様々な歴史資料収集を望んでいた私にとって、約5か月間の留学生活はまたとない好機であったと同時に非常に貴重な経験となりました。

授業の履修システムや留学生サポート体制は充実しており、異なる学部 of 授業であっても自由に履修出来ます。各学部 to 一人ずつ「留学生担当」の教授がいるため、履修に関する手続きの説明はその方から詳しく受けられます。専門に縛られず様々な学部 of 授業を履修できる点は非常に魅力的でした。しかし、授業について行くためにはコンスタントな予習復習を求められます。中間テストや期末テストの内容も、それ

までの授業内容 of 理解に留まらず、それを自分の言葉でわかりやすくまとめて伝えられる能力、さらには主題に対する自分の意見を述べる能力を問う、質 of 優れたものでした。留学生サポートに関して、大学生活における問題は大小問わず全て国際交流課 of 職員が担当しています。「何か問題・疑問が生じたらこの人に聞けばいい」という安心感が常にありました。語学学習は留学生個人の自律性に任されています。無料 of 語学学校が2種類、有料 of 語学学校が3種類あるため、自分の語学レベルや経済状況に合わせて最適な学習プランを自分で構築できます。

ストラスブール人の気質を一言に集約させるならば、「外国人を外国人扱いしないこと」です。大学生活においても、普通に過ごしていると、講義をよく分からないまま受講し、周りの流れに押されるようにして教室を出て行くだけなのです。助けを自ら求めないと状況が打開しないことは、外国人とのコミュニケーションに慣れていなかった私にとって、寧ろ自分を変える大きなチャンスでした。一度勇気を出して助けを求めると、フランスの方々は懇切丁寧にサポートしてくれます。先ほど述べた「外国人扱いしない」姿勢も、フランスの外側にいる「外国人」というよりも、「ストラスブールにいる人」という目で私を見てくれたからではないかと感じます。このような内と外 of 区別意識をあまり設けない根底には、この地域 of 複雑な歴史によって形成された異なるものへの寛容性があるのかもしれない。そのような環境に約5ヶ月間身を置いた経験を、まさにストラスブールのごとく、自身の内と外を問わず有益な形で還元していきたいと考えています。

フランス・ブレーズパスカル大学

生活科学部 人間生活学科
発達臨床心理学講座 3年
櫻川苑子

私はフランスの中央部の山間の町、クレルモンフェランの、ブレーズパスカル大学に留学していました。ブレーズパスカル大学には日本語学科がなく、クレルモンフェランは、何もない小さな町だと聞いていたので、1年間みっちり勉強するにはうってつけの場所だと意気込む反面、畑が一面に広がるような光景を想像していたので、出発する前はすごく不安でもありました。しかし、想像していたほどの田舎町ではなく、おしゃれを楽しんだり、遊んだりする場所がないというだけで、日常生活はなんの支障もなく送ることができました。それ以上に、クレルモンフェランは学生の町であるため、ゆったりと落ち着いた時間が流れていて、とても過ごしやすい町でした。

大学では、前期は心理学、後期は美術史の授業をメインに専攻していましたが、以前留学されていた先輩が、前期は授業は聴講だけにして、まず語学力を高めた、という話を伺っていたので、前期は聴講のみにしテストは受けず、夜は週に2回5時間ずつ語学学校に通っていました。しかし、初めの段階であまり考えずに決めてしまったのがいけないのですが、普通に履修してテストに挑戦するか、そうでなければ、日中に行われている、より長時間開講している語学のコースをとるべきであったと、後悔しました。まず、前期に専攻していた心理学ですが、わたしが学びたいと思っていた発達心理学をメインに、認知心理学や精神医学、社会心理学の授業を履修しました。同じ分野であっても、学び方が違ったり、具体的な例を学べたりして、違いを比較でき、また今までになかった捉え方を学ぶのが楽しかったです。前期では、心理学部で手続きをしたので心理学部の授業、後期は留学

生支援センターに相談をして授業をとることができたので、フランスでしか学べない違う分野のことも学んでみようと思い、美術史の授業を自分の好きな時代のものを中心に、多く履修しました。美術は好きでも、専門的な勉強をしたことはなかったので、美術館やお城などに行って美術作品を見る、見方が大きく変わりました。授業はすべてフランス語の講義形式でした。授業によっては本を読んでレポートを何回か提出、というものもありましたがほとんどのものがテストでした。テストはマークのものもありましたが、美術史は3時間論述ばかりで、留学生は紙辞書の持ちこみが許されてはいるものの、大学の図書館で急ぎょ借りたものであったので、語彙数が少なく、あまり役には立たず、という感じでした。学科によっては1時間や5時間の論述があったり、留学生のための少しやさしい試験を設けてくれる親切な先生がいたりもしたようです。

学校が始まる前は、留学生をサポートする団体の人が日常生活の援助をしてくれました。10か月の交換留学期間は終わりましたが、これらのことを思い出としてではなく、現在進行形のことにように捉え、フランスで出会った仲間と交流を続けて行くのはもちろんですが、留学期間中に学んだこと、感じたことを無駄にしないよう、今の生活に反映して、今後も学びを続けて行きます。

WHAT

ドイツ・ケルン大学

文教育学部 芸術・表現行動学科 4年
千種杏奈

まずドイツに行くまでは手続き関係で苦労しました。私は初のケルン大学留学生であったので情報が不足していることもあったり、ケルン大学の担当の先生が休暇に入ってしまったりして、メールの返事を長い間待ったりしました。なんとか出国までに入学許可書をもらい、日本を立つことができました。

しかし寮にいつ入れるのか、契約書をどこで手に入れることができるのか、わからないままドイツに入国することになりました。最初にまず私は international office (A A A Auslandersamt)の担当の先生に直接話を伺いにいくことにしました。

先生はとても優しく、寮の事から、付属語学学校の案内、留学生のための説明会、学生登録などを次々に進めてくれて、かなり安心した覚えがあります。

その先生が困ったことがあった際にかかなり親身になって助けてくれたこともあり、今後留学生がいれば、まず彼女に会いに行くことを勧めます。

最初の一か月は本当に語学学校と手続きに追われた日々でした。9月中旬からは履修登録が始まり、何段階かにわかれて授業を登録していく期間となりました。

私は中世音楽史を研究していて、ドイツでもそれができればいいなと思ってきたので、この留学で一番刺激を受けた授業は Hören Mittelalterliche Musik でした。

その授業は文献を読み、その文献について話したり、楽譜をもとにその曲について分析を交えた発表を生徒がしたりととてもレベルの高いゼミ形式の授業でした。

どの授業も目新しいことが多く、充実した勉強をすることができました。

私はドイツに行って初めはワクワクしていたし、何もかもが新鮮で、すごく楽しく、また友達もたくさんできて、上手くやれて、思っていた以上に充実した日々を過ごしていました。しかし半分くらいたった後はいつまでも上手くならないドイツ語に悩んだり、授業で苦労することが多く、だんだん辛いこともありました。さらに私は同じ年に入った友達が卒業してしまう一方、私はある意味時間が止まっている状況なので、焦ったり、帰ってからの進路などでドイツに来て良かったのかと正直後悔していました。

今ドイツから帰ってきて日本でたまっていたことが一気に押し寄せてきて日本に帰ったことも実感できずに現実に戻されていますが、これがやはり日本ということなんだなあと思いました。そう考えると、ドイツで過ごした時はとてもゆとりを持って自分の勉強をすることができ、ほかに様々な人生の糧になるような体験をすることができました。一番自分の中で変わったと思うことは日本を外側から見るのができたということです。

そう考えていくとやはりこの一年ドイツで過ごせたことは私の人生の中では大きく、やはり、行ってよかったと思えるようになるのではないかと思います。

今後はこのような経験を生かして、日本やドイツのためになる活動を音楽の観点から行えるように勉強に励みます。そしてドイツはとてもいい国なので、もしまた機会があったら訪れたいです。

WHAT

ドイツ・ブッパタール大学

人間文化創成科学研究科 人間発達科学専攻
教育科学領域 博士後期課程
田中直美

今回留学をする大きな目的は、ドイツ語の習得、そして現地の研究者たちとのコネクションを作ることでした。お恥ずかしい話、私はドイツ語を勉強したことがありませんでした。実際に留学する数か月前から、語学学校に通い初級コースを受け、留学先の大学に通う1か月前に、ドイツに渡って現地の語学学校で初級コースを終えました。長期留学は高校生の時に一度経験していたので、そんなに困ることはないだろうと思っていました。当時の留学先では「田舎の方はちょっと人種差別的な人もいるかもしれないよ」と言われていましたが、実際にそういうことはほとんどありませんでしたし、学校のサポートが強力だったこともあり、非常に有意義に過ごすことができました。なので余計にびっくりしたのですが、今回の留学中に差別的な発言を（それもドイツなのに！）多々耳にしたので本当に驚きました。日常生活以外でも、例えば授業でも、研究対象からして絶対に英語ができるはずなのに、私が困っていても絶対にドイツ語しか話してくれない先生がいたり、ドイツってこんなに仕切りが高い国だったのかと思わされました。ごく一部といえばこれはごく一部なのかもしれませんが、私も完璧にドイツ語が話せる状態で行った訳ではないので、だいぶ反省しました。

それでも日本語とドイツ語のタンデムの授業で仲良くなった友達は、多少語学ができずとも仲良く遊びに行ったり、時にはドイツ語を教えてもらったりと、特にそういったことを気にする必要はなく過ごせました。もともと日本に興味がある子たちが集まっているからという理由は大きいとは思いますが。

現在はそこで知り合った仲良しの女の子がお

茶大に2か月間、交換留学生として来てくれています。また日本でも会えて、何気ないことも話せるのでとても嬉しいです。



さて、当初の目的であったドイツ語の習得ですが、めげながらも自分よりちょっと（あるいはだいぶ）ドイツ語ができる留学生や、タンデムのネイティブの人たちに積極的に話しかけコミュニケーションをとった結果、語学学校のレベルではちょうど真ん中くらいに達しました。日常生活で何か困ることはありませんが、ゼミなどの議論や哲学書がスラスラ読めるようになるにはもう少し時間が必要だと思います。ですが、今回の留学を通して、ドイツ語に対する抵抗感などが解け、実際に研究対象としている思想家が過ごした町や関連する博物館なども訪れることができたので、研究のモチベーションはだいぶ上がりました。

残念ながら留学先の担当の先生と私の研究対象が異なるため、そこからさらにつながりは増えませんでした。研究対象と関連する学会に参加した際に、何人かの先生方とお話することができ、今でも研究についてアドバイスを頂いたりしています。今後も、今回の留学での経験を生かして研究に励みたいと思います。

WHAT

ドイツ・ブッパタール大学

人間文化創成科学研究科
ライフサイエンス専攻
人間・環境科学コース 博士前期課程
田中瞳

私は2012年10月から10か月間、ドイツのノ르트ライン＝ヴェストファーレン州のブッパタールにあるバーギシェ・ブッパタール大学に交換留学をしました。

私がドイツに留学を決めた理由は大きく2つありました。1つは、私は大学院で人類進化の研究をしており、デュッセルドルフ郊外にあるネアンデルタール人骨の出土地、ネアンデル渓谷にある『ネアンデルタール博物館』を調査したかったこと。そして2つ目はヨーロッパで学生として生活し、実際に生活しないと見えてこないヨーロッパを知りたいという思いがあったからです。



渡独して、まず直面したのが言葉の壁でした。留学に向けドイツ語を少しずつ勉強してきたものの、当然現地では全く使い物にならず、大学や寮の手続きをするスタッフとの会話はドイツ語のみだったので、本当に大変で、まわりの友人に助けられてばかりでした。大学に併設されたドイツ語コースに通い続けたことで、少しずつ

つですが博物館の展示の説明が読めるようになっていきました。しかし、ドイツ語が上達するにつれ、英語が退化し、英語を喋りたい時もドイツ語の単語が出てきてしまうという現象に悩まされる時もありました。

留学中は財布を盗まれてしまったり、ビザがなかなか取れなかったり、途中で部屋を引っ越さないといけなくなったりと、ほとんどが自分の不注意から招いてしまったことですが、日本では経験したことのないようなトラブルも多々起こり、その度に苦しい思いをしたのを覚えています。何度日本に帰りたと思ったかわかりません。しかし、そんな私でも、ドイツに来なければ良かったと思ったことは一度もありませんでした。それはきっと、とても素敵な友人たちに出会えたからだと思います。

私はこの留学を通して、日本では経験しないような困難に直面しては乗り越えてきたことで、人として強くなったと思います。また、同時に自分は弱く、未熟であることにも気が付きました。なぜなら、その困難を乗り越えるときはいつも家族や友人に支えられていることを実感したからです。本当に感謝しています。そして今度は私が周りを支えていける存在になりたいと思いました。

この10か月間の経験は、私にもっと世界のいろんな事を知りたい！と思わせてくれました。たくさんの学びきっかけを与えてくれたと思っています。そして出会えた友人と次に会えた時にもっと会話ができるよう、英語もドイツ語も頑張ろうと思いました。そして、日本に対しても意識が変わりました。日本はとても個性的で魅力的な国です。私は日本が大好きです。

これからは、ドイツで10か月間過ごした自信を胸に、世界に日本の魅力を発信し、日本と海外をつなぐ架け橋となるべく努力していきたいと思っています。

オーストリア・ウィーン工科大学

理学部 物理学科 3年
大下紗百合

ウィーンといえば、ヨーロッパの中でも特にクラシック音楽が盛んであり、「音楽の都」とも呼ばれています。また、治安も比較的良く、世界で最も質の高い生活が送れる都市ランキングで3年連続1位の座を獲得しています。一見物理とはあまり縁がなさそうな国なのですが、ウィーン工科大学は高校物理でも学習する、ドップラー効果を発見したクリスチャン・ドップラーの出身校であり、また工科大学ということもあり、色々な分野を勉強できるという点に魅力を感じ、昨年貴重な1年間をウィーンで過ごして参りました。これまでずっと日本で平凡にそこまでの努力も挫折もすることのなかった私にとって、この1年はとても刺激的で魅力的な1年間でした。

留学中は何度も壁にぶち当たりました。まずは、留学前から覚悟していた語学の問題です。ウィーンの公用語はドイツ語で、当たり前ながら基本はドイツ語を使用しなければいけません。また、大学の授業はほとんどドイツ語で、英語で行われている授業はほんの一部で、しかも学部生用ではなくマスターやドクター生用だったので、日本でもまだ基礎しか学習していない私にとっては、高度なお話すぎてとても理解することはできませんでした。その高度な授業をずっと続けるべきか悩みましたが、やはり語学の壁があったとしても自分のレベルにあった授業を選択し、その中で頑張っていこうと思い直し、後半のセメスターはドイツ語の科目の授業を主に履修しました。とても大変でしたが、思うような結果は上手く出せませんでしたが、自分が思い出せる中で一番努力をした期間でしたので、満足しています。

つぎにあげるのは、留学中の人間関係です。
お茶大からウィーン工科大学への派遣生は1名

で私だけでしたので、友達が誰もいない状態でのスタートでした。英語もドイツ語もままならない私は不安で一杯でした。しかし、運がいいことに留学前のドイツ語の語学学校で他大学からの日本人留学生に出会い、友達になることができました。はじめ私は現地の友達を作る機会にめぐり合うことがあまりなく、現地の友達を作ることが出来ませんでした。しかし、ウィーン工科大学ではなく、ウィーン大学に日本語学科があり、そこでアシスタントを募集しているということを、前学期から工科大学に留学中の他大学の方から教えていただき、そこでアシスタントをさせていただけることになりました。日本語学科の生徒の方は日本に興味がある方ばかりでしたので、お互いに母国語を教えあうタンドেমをしたり、休日にはカフェに行ったり、お家にお邪魔してもらいゲームをして遊んだり…、このようなことを一緒にできる友達と出会うことができ本当に良かったと思います。振り返ると良いことばかりではなく、納得のいかないことも何度もありましたが、それらを含めてとてもいい経験をさせて頂いたと思っています。



WHAT

ルーマニア・ブカレスト大学

生活科学部 人間生活学科
生活社会学部 4年
松田郁代奈

ルーマニアに交換留学と言うと、まず返ってくる反応が「何で!？」というものでした。ルーマニアを選んだのは私の専攻分野、そして卒論に関わる理由でした。私の専攻分野は障がい者社会福祉政策、そして卒論のテーマが、ボランティアと宗教の関係についてです。そこで、英語で社会福祉の授業が取れる大学を最優先にしました。

しかしながら実際にルーマニアに行き事が決まると、私以前に行った人がいなく、手続きから分からないことが多すぎ、ルーマニア入国 1ヶ月前まで住むところさえもはっきりしない状況でした。ルーマニアに着き、始業式の日に通訳の先生に所へ挨拶に行くと、「実はブカレスト大学での社会福祉の授業はルーマニア語でしかなく、英語で授業が受けられるのは社会学だけでしかもマスターコースの授業だけだけど、どうする？こちらとしては、留学生がいるのは大歓迎だけど」と言われました。このような感じで留学は分からないことだらけのことから始まりました。しかし、日本人学科の生徒の助け、クラスメイトの助けもありその後は学校生活、ルーマニア生活で困ることはほとんどなかったように思います。学校生活は、マスターコースの授業を受けていたので、毎日のように読む文献が多く、内容的にも難しいものが多かったです。しかし、授業中、授業後、またはメールでの質問や感想に教授は丁寧に答えてくれました。

私生活についてはとても恵まれていたと思います。そこには大きく二つの出会いがあります。まず、幸運にも在ルーマニア日本大使館職員の方に友人を介して知り合いができ、そこから日本人会の行事、大使館のイベントにも呼んで頂

き、そこでルーマニアで働く日本企業の方々、日本人学校の先生方と知り合うことができました。また、旅程でたまたま知り合った女性が私の興味関心と同じフィールド（障がい者支援）で働いていると知り、連絡先を交換しました。彼女との出会いが私のルーマニア生活をとっても充実したものにし、また、大きな支えとなりました。ルーマニア到着後、すぐに感じたのはルーマニア人の友人や知人に対する面倒見の良さです。その印象は留学が終わるまで一貫したものでした。帰国後、留學生活のことが忘れられず、そして様々なことに対して整理をつけられずにいました。私の大学生活の一つの大きな目標は留学をすることであったからです。当たり前のことかもしれませんが、私のこれからの課題は留学を最終目標に終わらせずに、今後にどう生かしていくかです。そしてそのために、本当は望ましくないものではあるのかもしれませんが、私が留学中に無くしてしまったものを含め、そして、留学中に变化したこと、発見したこと、学んだことに向き合いたいと思います。留学中は留学の意味を探したり、留年して留学をしたことについて考えた時もありましたが、今はしっかりと留学してよかったと思っています。留学前から最後までサポートしてくださった、先生方、両親、友人に心から感謝しています。そして留学中に会った友人は何とも言えないほど本当にかげがえのない存在です。

ポーランド・ワルシャワ大学

文教育学部 言語文化学科
グローバル文化学環 4年
中坪佑香

日本ではなかなか馴染みのない国、ポーランド。留学に行くことになった私に、一番多かった言葉が「ポーランドってどこだっけ？」でした。中世の時代にヨーロッパ最大の王国として栄華を誇ったその国は、時の流れとともに、列強各国による国土分割、国の消滅、ナチスの侵略・統治、ソ連による共産主義化、資本主義への体制転換、EU 加盟と、世界史上でも類を見ない波乱万丈の道を歩むことになります。アジアでは歴史が現在の国際関係や多文化共生に大きな影響を与えている。では、他の地域ではどうなのだろうか？「辛苦の歴史」と EU という「共存の現在」を持つポーランドに惹かれ、ワルシャワ大学への交換留学を希望したのが、今から約 2 年前、大学 2 年生のときでした。

では、ポーランド人とはどのような人たちなのか。私自身は、親切な人が多い国だと感じました。さて、肝心の大学生活の方に話を進めます。お茶の水女子大学からの交換留学生は、ヨーロッパの学生の留学システムである ERASMUS の学生としてワルシャワ大学に受け入れられます。そのため、授業中に会うのはほとんどがヨーロッパ人。授業も EU に関するものが特に充実しており、何より、授業を通して EU 市民であるクラスメイトと意見交換できるのが楽しかったです。受講する授業は、上記の ERASMUS のものの他に各学部・学科で開講されるコース、POLONICUM というポーランドの言語・文化を学ぶコースの中から選択できます。POLONICUM では、週に 2 回のポーランド語の授業の他、ポーランドの歴史について学ぶ授業を取っていました。私の取っていた授業は、第二次世界大戦や体制転換直後のポーランドを描いた映画を観て、歴史を学ぶとい

う内容だったのですが、自分一人では知り得なかったであろう映画を、現地人の先生の解説と共に観られるということで、大変興味深かったです。映画の内容は暗いものが多かったのですが、授業終了後は毎回何とも言えない気持ちになるのですが、それでも毎週楽しみに通っていました。

日本ではなかなか馴染みのない国、ポーランド。そこには、2 年前の私が考えていた以上に、深い歴史と、日本とは違う文化がありました。特につらかったのは冬です。ズシンと身体に響く寒さ、午後 3 時から沈み始める太陽、「寒い・暗い・長い」の三十苦の冬は、私から外出する気力を奪い、ひたすらに考える時間を与えました。その時に、自分と向き合い、ひたすら考え、出した答えやその道のりで感じたことが、留学生活の何よりの収穫だと思っています。また、最初に上げた学問的な疑問に対しても、今の時点での答えを得ることができました。留学は終わりましたが、逆に言えば終わったのは留学だけで、私の勉強も、生活も、まだまだ続きます。ポーランドで学んだことを胸に、留学前からのテーマも、留学中に得たテーマも、更に突き進めていこうと考えています。



WHAT

韓国・梨花女子大学校 ポーランド・ワルシャワ大学

文教育学部 芸術・表現行動学科
グローバル文化学環 4年
西島理恵

約1年半に及んだ留學生活を終え、日本に帰って来て、自分が日本社会を観る眼、そして自分自身の将来に対する姿勢が大きく変わっていることに気が付きました。留學する前に、想像していた、期待していた100倍以上のものを得て帰国できたと言っても過言ではないほど、わたしの交換留學生活は充実したものとなりました。



わたしは、韓国・ソウルにある梨花女子大学で前後期の2学期間、ポーランド・ワルシャワにあるワルシャワ大学で1学期間、交換留學生として勉強し、最後にもう一度韓国に戻り、日中韓三国協力事務局（TCS）で約6週間のインターンシップを終え、日本に帰国しました。

中学生の頃から、日韓関係に興味があり、いつか音楽を通じて日韓を繋ぐ架け橋になりたいという漠然とした夢を抱き、大学に入学したわたしでしたが、授業の一環で行った韓国・淑明女子大学での夏季短期プログラムをきっかけに、自分の体で韓国の春夏秋冬すべてを感じたい、そして日韓の間に山積みになっている歴史問題や領土問題に対する韓国人の生の意見を知りたいという思いから、韓国への前後期留學を決め

ました。しかし、もう一か国、わたしの中で、気になって仕方がない国があったのです。その国がまさに、ポーランドだったのです。ポーランドに留學に行ってきたと言うと、必ず「どうしてポーランドに行ったの？」という質問を受けます。確かに、ポーランドは日本からの直行便もなく、これといって有名で華やかな観光スポットがあるわけではありません。しかし、ポーランドは、共産主義時代を経て1989年に現在の共和国となった後、2004年にEUに加盟し、近年起こった欧州経済危機の際にも、EU圏内で唯一、GDP+の成長率をみせるなど、まさにこれからの成長発展に期待できる国です。その一方で、過去にはポーランド分割により地図上からポーランドという国名が消えたり、ユダヤ人の大量虐殺が行われたアウシュビッツ収容所があったりと暗く悲しい側面を持っている国でもあります。結局、どちらも諦められないわたしは、日韓関係における韓国の立場を勉強するために韓国へ、その後、日韓関係と独波関係の比較、そして複文化複言語主義をとる欧州から日韓友好関係構築への糸口探しのためにポーランドへと渡ることにしたのです。

自分なりに、しっかりと学習目的を持って留學をしたつもりでしたが、いざ現地で生活を始めてみると、そう簡単にはうまくいきません。まず、ぶつかったのが言葉の壁。韓国では韓国語、ポーランドではポーランド語が話されています。どちらの国も、学校から一步、外にでると、英語はほとんど通じません。右も左もわからない状態で始まった留學生活でしたが、今振り返ってみると、この一年半で得られた一番の宝物は「人との繋がり」だと思います。留學中、本当にたくさんの人に助け、支えられ、多くのことを学びました。時に、自分がその国でマイノリティーであるからこそ、巡り会えたと思う人もいました。

まずは、韓国から。わたしは、韓国で一生の友人に出会いました。彼女はわたしの language exchange のパートナーでしたが、今ではその

WHAT

枠組みを超え、家族同士でお付き合いするほどの大親友です。育ってきた環境も文化も違う一人の人と出会い、友人となり、多くの時間を共にすることで見えてくる新たな韓国の姿がありました。同じ東アジアの国であり、歴史的文化的にも多くの共通点がある韓国という国は、よく、日本と似ていると言われます。わたしも、そう思っていました。しかし、多くの共通点の中に、小さな違いがいくつもあるのだということに、彼女を始めとする友人と付き合っていく中で気が付きました。韓国も“異文化”の国だったのです。その事に気が付かず、お互いがお互いの当たり前を強要してしまうが故に、日韓の間には未だ解決しない多くの問題があるのではないかと思います。また、大切な友人や言語の習得を通して韓国が自分の心の中で第二のホームになっていくのに従って、それらの問題に対する自分の姿勢が変わっていくことに気が付きました。歴史的共通見解を作っていくというアプローチ方法ではなく、互いが互いのことを思いやり考える中で地域全体の未来を見据えた解決方法を追求していくという方法で、日韓の間の問題を解決できないかと思うようになりました。自身が国境を越えたアイデンティティーを形成することで、国と国を跨ぐ問題に対する意識が変わり、今後、自分が目指す理想の姿、そして他者への働きかけの方向性が変わりました。

そして、ポーランドです。ポーランドへは、先述したとおり、ポーランドの歴史的な部分や、欧州について学びに行ったのですが、ポーランドにいた 5 か月間で一番学んだことといえば、「日本」についてでした。欧州でも少し異質で、国内に住む人の約 98%がポーランド人という環境で、日本人はおろか、アジア人を見かけることはほとんどありませんでした。それ故に、自分はアジア人であるのだというアイデンティティーを形成することになりました。そして、**Jestem z Japonii ! (: I'm from Japan.)** と言うと、日本に一度も行ったことがないのに「大好

きだよ！」「美しい国だよね！」「**SUSHI** 大好きだよ！」という答えが次々と返ってくるのを聞き、世界における日本の立場を改めて認識することとなり、それを誇りに思うと同時に、これからも日本人としてそれを大切に守っていきたいと思う気持ちが芽生えたのです。それは、今後自分がどんな立場で生きていくとしても自身の軸となるアイデンティティーであり、自分が日本人であるという事実は変えられないものであり、韓国で形成された国を超えたアイデンティティーと共に育てていくべき大切な部分であると気が付いたのです。わたしは、お茶の水女子大学の交換留学生として韓国とポーランドという二カ国に留学し、学生生活を送ることができて、本当に幸せでした。



WHAT

韓国・梨花女子大学校

人間文化創成科学研究科
ライフサイエンス専攻
食品栄養科学コース 博士前期課程
見上葉子

私が、この交換留学制度に応募した最初の理由は、どこでもいいから海外に行ってみたいというものだった。その中でなぜ韓国を選んだかというと、強くひかれたのが韓国料理と食文化だった。留学するにあたり、国を選ぶときにそのことをふと思い出した。最近では日本国内の韓国料理店も増加傾向にあるようだが、本場へ行き、実際の韓国の中の食というものを学び、感じたいというのが私の韓国への留学のきっかけだった。

まず、学校についてだが、私は前後期とも韓国語の語学の授業を中心とし、自分の専門である食品や栄養学、体育などの授業をとった。食品系の授業のほとんどは日本でも1回聞いたような内容がほとんどだったが、同じ内容でも韓国での授業のしかたや、伝承食品を絡めた話、学生のプレゼンテーションなどもあり興味深かった。また、グループワークや実験のある授業も取ったので、その学科に友達ができたのもよかったと思う。一方、体育では以前から興味があった韓国の伝統仮面舞踊を受講できた。梨花大には舞踊コースもあるので、専門の先生が教えてくれるが、学生は多学科も多くいるので気楽に受講できた。そこでできた友達のおかげで、他の伝統芸能を解説してもらいながら鑑賞する機会もあり、韓国文化への理解も少し深まったように思う。

次に私が個人的に行っていた、韓国の食に対する活動について報告する。まず、梨花女子大学から留学生に紹介があった活動である **K-FOOD supporters** というのに参加した。これは、韓食財団という韓国料理を世界に広げるための活動を行っている団体が主催しており、

その一環だった。我々外国人留学生の活動は基本的には Facebook などの SNS で自国の友人たちに韓国料理を伝えることだった。また、個人的に宮廷料理研究所というところでやっている、料理教室にも通った。ここでは、韓国の宮廷料理をベースとした料理を英語と韓国で、基礎から丁寧に教えてくれた。

この留学中で苦労したことももちろんある。一つは、秋学期の時に入っていた寄宿舎のルームメイトとのことだ。私自身、留学前から希望していたこともあり、冬休みから寄宿舎を出て、学校の近所の下宿に移った。慣れない外国で、部屋を探し契約をするのは大変であり、引っ越しに伴う新たなトラブルも生じたが、結果としてとても快適に暮らせたので、正しい判断だったと思う。

私は交換留学生という身分で韓国で生活できてよかったと思う。交換留学生は自分がやりたいと思ったことをやるための、時間と手段がある。単に韓国語を学ぶだけでなく、それを手段として用いて韓国で活動できたことを誇りに思っている。



韓国・梨花女子大学校

文教育学部 言語文化学科
グローバル文化学環 3年
山下佳乃



留学に憧れを抱いたのは、小学生の頃でした。足掛け 10 年の夢が実現したのが、今回の留学でした。

私の留学の目的は「自分の専門分野を日本の外で学ぶこと」でした。専門分野と言っても、開発や国際協力、国際関係といったいくつかの分野にまたがって興味があり、特に留学前は国際協力に比重を置いて勉強していました。留学先の韓国・梨花女子大学には国際関係学部があり、留学生は学部の授業だけではなく、大学院の授業も受講できることが大きな魅力でした。また英語開講の授業が多く、選択肢の幅が広がったことも、この大学での私の留学生生活を有意義なものにしました。

韓国の大学は春学期（3～6月）と秋学期（9～12月）の二学期制で、日本同様春に年度が始まります。留学生向けの寮（International House）に住む留学生がほとんどで、同じフロアに住む学生とは、よくキッチンで食事を一緒にしたりしました。韓国語の能力はまちまちなので、共通語として英語でコミュニケーションをとることが多かったです。

実を言うと、私は留学前に韓国語の授業を一度も取ったことがなく、渡韓したばかりの頃はかろうじてハングルが読めて、簡単な挨拶ができる程度の語学力でした。前・後期とも、午前中は韓国語の授業を受講しました。授業は朝8時から始まりハードでしたが、クラスメイトとは戦友のような一体感を得ながら仲良くなっていきました。この授業は梨花女子大学の語学堂から派遣された先生が担当するため、質の良い授業を受けることができます。後期には、韓国語で開講される歴史系の授業を受講することもできました。

午後は主に国際関係に関する英語開講の授業を受講しました。授業についていくのには予習復習が欠かせず、課題も山積みで、自分の英語力の足りなさを痛感し続ける日々でした。それでもベストを尽くしていることは伝わったのか、「わからないから教えてほしい」と口にすれば、教授もクラスメイトも快く手を差し伸べてくれました。選択した授業を最後まで乗り切れたのは彼らの助けがあったからこそです。言語の壁にぶつかり、文化の違いに戸惑うこともありました。しかし今思い返してみると、苦しかったことやつらかったことも含めた全てが私の留学を彩ってくれています。「留学に憧れていた自分」は「留学を終えた自分」になりました。留学は想像以上に刺激的で新しい発見に満ちていて、今までで一番密度の濃い 10 ヶ月でした。この留学で何を学んだのか、まとまった言葉はまだ見つかりません。確かなことは、この留学で得た様々な出会いや発見が、私にとってかけがえのない財産だということです。

WHAT

韓国・梨花女子大学校

文教育学部 芸術・表現行動学科
グローバル文化学環 3年
森田真奈子



私は長年関心のあった東アジアの歴史問題についての視野を広げたいと思い、韓国の梨花女子大学校へ留学しました。私が到着した 2011 年の 8 月はちょうど韓国大統領の竹島/独島への上陸などが合間って、日韓関係が急速に悪化した時期でした。到着当初は、日本の友達から韓国に在ることを心配されるほどでしたが、実際に現地にいると特に問題はなく、むしろ政治的に難しい時期に留学できたことは良い経験になったのではないかと思います。

大学での授業は、留学生用の中級韓国語に加え、東アジアの近現代史や国際関係、韓国の宗教文化に関する英語での授業、またネイティブの先生によるフランス語会話の授業を受講していました。韓国の大学は、一つの授業が週に二回ある上、毎週かなりの量の文献購読を課されるため、授業はとてもハードでした。また、毎週の文献講読やレポートなどを通して、外国語での文献講読スキルを身につけることができたのも良かったです。

梨花女子大学校は留学生が非常に多く、アフリカや中東なども含め世界中からの留学生が学んでいました。私は留学生用の国際寄宿舎に住

み、スウェーデンからの留学生がルームメイトでした。日本では実家暮らしだったため、一人暮らしは初めてで、さらに外国人とのルームシェアということで最初はとても不安でしたが、ルームメイトとは徐々に打ち解け、和気あいあいと過ごすことができました。また、寄宿舎では世界中からの留学生達と一緒に勉強する機会も多く、授業でのわからない点を教え合ったり、各国の文化や社会に関する様々な情報を直接聞いたり、寮生活は今から思い出しても懐かしいことばかりです。

留学生活に慣れてきた後半からは、短い期間でしたが課外活動にも挑戦しました。一つは、フランス語の学内新聞に記事を書くというもので、韓国語のクラスメイトだったモロッコ人の友人にフランス語圏と韓国の比較をテーマにインタビューをして、フランス語で記事を載せました。そしてもう一つは高校生の頃から関心のあった慰安婦問題について取り組むサークルに参加しました。私がいた時には、毎週集まって文献講読を行うという活動が基本でしたが、唯一の留学生の私を温かく迎え入れてくれ、この問題を国家間問題ではなく、男性中心主義に帰する問題だと捉えていたことが印象的でした。

このように梨花女子大学ではたった一学期間でしたが、本当に恵まれた環境で充実した時間を過ごしました。帰国後も留学中に知り合った友達とは連絡をとり続けており、そのような心から信頼し合える人々と出会えたことが留学を通しての何より大きな収穫だったと思います。

ニュージーランド・オタゴ大学

文教育学部 言語文化学科
英語圏言語文化コース 3年
進藤美沙

私が交換留学への応募を考えたきっかけは、1年生の春休みに参加したオタゴ大学での短期語学研修です。日本とは全く違う海外の大学の様子を知り、日本の大学では得られない経験をしてみたいという思いから実際に大学に通うことのできる交換留学に興味を持ちました。オタゴ大学に戻ろうと思ったのは、ニュージーランドののんびりとした雰囲気が自分に合っており長期留学に向いていると考えたのと、留学生でも履修できる授業が多くあるからです。

授業が始まる前には留学生向けのオリエンテーションに参加したり、メンター（留学生の勉強や生活をサポートしてくれる）の方に履修登録などについて相談したりしました。留学生が多いためか、受け入れ体制はしっかりしていました。

ホームステイと語学学校がメインの語学研修とはまるきり違い、今回の留学では現地学生と一緒に寮生活を送り、大学の授業を受けました。どの授業も講義とディスカッション中心のチュートリアルからなります。語学学校の授業を見学し、実際に英語の授業をおこなうという実践的な科目もありました。課題は予習などに加え、エッセイや発表が学期に3回ほどありました。課題をこなすには授業内容の理解・応用が求められ、使用言語が英語なのもあって毎回かなり時間をかけました。定期試験はどれも2〜3時間でエッセイ2〜4本を書くという重いもので、試験期間はみんな人が変わったように勉強していました。大変でしたが、授業や課題の内容は学生に力をつけさせるようにとても考えられたもので、教授の熱意が伝わってきました。この10カ月は間違いなく大学生活で一番勉強した期間だと思います。

励ましあって勉強したり、書いたエッセイをチェックしてもらったりしたのが寮の友達でした。ニュージーランド人中心の寮に入ったため、疎外感を感じないか不安でしたが、気さくな人ばかりで3食をともにしているうちに自然と仲良くなりました。日本人の留学生とは悩みを共有し、励ましあっていました。同じ立場にいても留学目的・考え方は様々です。留学先で日本人と交流することにはマイナスのイメージもありましたが、彼らから受けた刺激はとても大きかったです。長期休みにはいろいろなところに旅行することができました。現地のガイドさん、世界中から来る旅行者など、旅先でもたくさんの出会いがあります。

今回の留学の一番の目標は英語力の向上、そして興味のある英語教育についての知識・理解を深めるというものでした。しかし、実際に得たものはこれだけにとどまらず、人間的にも大きく成長することができました。行ったのはニュージーランドですが、世界中の人に会えたような気分です。私を成長させてくれたこれらの出会いに感謝しています。



WHAT

アメリカ・パーデュー大学

生活科学部 人間生活学科
発達臨床心理学講座 4年
水谷 友紀

パーデュー大学に留学をさせて頂き、学んだことは数知れません。交換留学生在が帰国後口を揃えて言うように、交換留学生として海外で過ごす一年間は、比類なく充実したものであり、人生において一番、人として大きくなる一年間であると思います。

さて、交換留学における学びですが、それはもちろん勉学に関係することばかりではありません。多くの交換留學生は自分の研究内容において学びたい、さらに深く研究をしたいことがあり、留学先の国の視点で研究内容を深めていくことを目標としていることかと思いますが、私の場合の学びはそれとは元から異なるものでした。私が学びたかったことは、アメリカ人の考え方や世界の捉え方でした。発達臨床心理学とはいえ心理学専攻である私にとっては、アメリカで生活をし、アメリカを肌で感じ、なおかつ色々な国の人と討論をし考え方を学ぶことが、とても興味深かったのです。そしてわたしが最終的に学んで帰ってきたものは『世界を舞台にどう生きていくか』の答えでした。

とにかく色々な人に出会い、色々なことに挑戦し、色々な分野を学び、この一年で自分の将来を見極めたいと目標を立てました。

結果として、一年間でとった授業は経営者を目指すクラス、カスタマーケアのクラス、グローバル企業でのリーダーシップについてのクラス、観光業のクラス、交渉学のクラスととても多岐に渡り、全てのクラスからその業界のおもしろさと、なおかつ、世界を股にかけるために共通している事項を学びました。

色々な国の人がひとつのキャンパスで学んでいる環境で学んだことは本当に計り知れないも

のでした。様々なことを学びつつ、私がアメリカで出した結論は、『インターナショナルビジネスと心理学の狭間が面白い』ということでした。グローバルに色々な国で展開する企業や多国籍企業の多いこの時代において、ひとつの商品をそれぞれの国でどのように展開しその国の人の心を掴んでいくか、また、日系企業が他国に進出していくにあたり、現地でどのような人を雇うべきなのか、多国籍企業においてどのような被雇用者のケアが必要であるのか等、学び考えれば考えるほど、その内容はとても興味深くおもしろいものでした。

そうとわかれば次に考えなければならないことは、インターナショナルビジネスと心理学の狭間で生きていく方法です。アメリカで生活してもう一つ気が付いた重要なことは、西欧では大学での勉強が既に就職後のトレーニングを兼ねているということです。つまり、在学中に勉強したことを生かし就職し、即戦力になることを求められることが多いため、大学での専攻科目と就職先の仕事内容は通じていないと就職は難しいのです。

結論として、大学卒業後すぐに外国で希望の職につくのはとても難しいのです。そしてアメリカ留学への締めくくりとして、卒業後ヨーロッパのビジネススクールでインターナショナルビジネスの修士号をとることに決めました。私のアメリカ留学は、とても大きな夢を以て締めくくられました。

アメリカ・Vassar College

文教育学部 言語文化学科
英語圏言語文化コース 3年
生駒有紀

2012年晩夏、新学期よりも一足先にヴァッサー大学留学生オリエンテーションウィークが始まりました。世界中から集まった80人のうちほとんどは一年生で、私のような交換留学生は約10名、日本人はひとり。どきどきの初日、私はまわりのネイティブ並の英語力に途方に暮れました。会話は速くて半分何を言っているのかわからない。圧倒されっぱなしで夜寮の部屋に帰ればはじめての生活に慣れないことも多く、親切な先輩はついてくれましたが、何をするにも隣部屋の女の子とともに手探りでした。一週間のオリエンテーションが進むにつれたくさんの人と話す機会があり、不安なのはみんな一緒だと気付いてだんだん安心できました。

ディスカッション型の講義では人の意見を聴いてレスポンスすることが基本です。臨機応変に進む授業に、ときに100ページ以上にも上る予習の読書量。教授陣はみんな親切で英語のレベルは気にしないとおっしゃってくださいりましたが、ごはんや校内イベントに誘われても勉強があるからと部屋にこもることも多く、それでも課題を消費しきれないことに力不足を実感する日々でした。そんなときに「ホスト(ヴァッサーの先生や職員が留学生一人一人についてくれるのです)との懇親会ディナー」がありました。私のホストはベスさんという方で、この人と出会えたことは本当に幸運でした。ベスさんは「あなたは勉強だけをしにここへ来たわけではないでしょう、もっと楽しんだらいいのよ」と言って、スタディー・アドバイザーを紹介してくれました。

秋が深まるころにはレポートでAをもらったり授業ではめられることも出てきて、寮の友達と夜遅くまでカフェで話したり、週末にバスで

遠出して遊びに行く余裕も出てきました。しかし調子づいていたある日、教育の授業でグループ会議をした際、私はメンバーの議論についていくのに必死で自分の意見を言えず討論に貢献できないまま解散になってしまいました。少し成長できたと思っていたのにまだまだ未熟な自分が悔しくて涙が出てきました。母親にそのことを話すと、現地の子と対等に話せなくて当たり前だと思うのではなく、悔しいと感じることができた私のことを誇りに思うと励ましてくれました。もともと両親は私の留学に反対で、特に心配性の母にはわがままを押し通す形でアメリカに来たのにも関わらず、絶えず私を気にかけて惜しみない愛情を注いでくれる親の大きさを知り、自分がまだまだ自立できていないと痛感しました。また私よりも英語が数段できる他の留学生の友達も国内生との間には討論の際などに実力の差を感じていると聞き、私ももっと頑張ろうと思うことができました。

帰国から3ヶ月経った今も目を閉じれば泣き笑った日々が鮮やかに浮かびます。きっとこれからも Vassar での思い出は色褪せることなく私に勇気を与え続けてくれると思います。



WHAT

中国・北京外国語大学

文教育学部 言語文化学科
中国語圏言語文化コース 2年
鈴木涼子

到着した北京首都国際空港から北京外国語大学までは車で約1時間。空港がある北京の東の端から、西の学校地区へ。九月初め、こうして私のハブニングだらけの愉快的留学はスタートしました。

到着翌日、英語の通じなさに驚きを覚えつつ、どうにか中国語で入学・入寮手続きを終えるも、肝心の食堂のカードとインターネットの登録ができなかったため、事務室探しを兼ねて学校探検をする羽目に。私の派遣先大学である北京外国語大学(通称:北外)は、北京市内の大学の中では少人数の学校で、学生数はお茶大より少々多いくらいです。しかし学生のほとんどが寮生活のため、学校の敷地面積は大きく、設備もスポーツジムやプール、スーパー、カフェなど充実しています。日常生活なら学校から出なくとも困らないほどです。探検中に出会った現地学生に事務室を尋ねつつも、正確な答えを得られず、学内をさまようこと三日。同じ寮の日本人留学生に教えてもらい、どうにか食堂カードとインターネットの登録を終えることができました。その留学生曰く、留学生の事務室なんて現地学生はほとんど知らないそう。

語学留学の必修はさほど多くなく、クラスメイトは外国語大学だけあって多国籍でした。1クラス 15 人前後で日本人韓国人が各クラスに 1~2 人といったところ。その他は欧米、東南アジア、中東など様々です。日本と違い一限が 8:00 からなのには驚きましたが、ほとんどの学生が寮生活だからと聞き納得。寮といえば、私の住んだ国交楼は教室棟と隣接していたので、冬は外気に当たらず移動ができました。私のクラスの授業は中国語のみでしたが、初級クラスは英語で補足しつつの授業だったようです。教

師の割合は女性が多く、それにも驚きでした。選択授業は幅広く、法律、商業、旅行、伝統文化、歴史、資格試験対策などもあります。そのほかに夕方から課外授業もあり、音楽(二胡)、書道、中国絵画、太極拳の体験学習ができるようでした。

前期は慣れるのと聞き取るのに必死でしたが、後期は余裕ができてきたので、現地友人と一緒に現地学生向けの授業を聴講、伝統音楽と中国哲学の授業を良く聴きに行きました。他大学から専門の教授を招いている授業もあり、知識的語学力的についていけない部分もありましたが、とても有意義な時間でした。

週末を利用した観光も留学の楽しみでした。北京市内の頤和園、故宮、景山公園、天壇、南鼓巷、前門大街、天安門広場、国家博物館、盧溝橋、抗日博物館、オリンピックスタジアム、老舍老館など有名どころは一通り行き尽くしました。この留学中、積極的に外に出て、日本で体験できないこと、見られないことを見ることができました。日中関係が不安定である昨今、中国留学に行きたくても安全性を不安に思う方もいるかもしれません。安全性については、首都の北京や上海などは比較的安全と言われていますが、時期や場所によってはやはり危険です。しかし、興味を持っているのでしたら、必ず得られるものがあります。ぜひ、一步踏み出して、中国の土を踏んでいただきたいです。

編集後記

私が大学生のとき、はじめて海外に飛び出し、大きく成長して帰ってきたことを今でも覚えている。留学は大学の授業では学ぶことができない、さまざまなことを身をもって教えてくれる、絶好の機会である。学生のみなさんの体験談も、論より証拠、海外留学がいかに関われわれの可能性を引き出し、大きく伸ばし、グローバルに成長させてくれるかを表して余りある。グローバル時代を迎えた今日、これからの日本の未来を担うのはこれら留学を経験した学生であると確信している。ぜひみなさんもこれら先輩に続き、世界に向けての夢を現実のものにしてほしいと心から願っている。

(森山 新)

発行日：2014年3月31日

発 行：お茶の水女子大学グローバル教育センター

お茶の水女子大学グローバル人材育成推進センター

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

Tel/Fax：03-5978-5913

監 修：森山 新（グローバル教育センター長）

編 集：青山彌紀、長塚尚子（グローバル人材育成推進センター）

印刷・製本：よしみ工産株式会社



STUDY ABROAD
ANNUAL REPORT 2012
Experiencing the World